

家族の成長や暮らしの変化にあわせて、住まいに求められる機能や要素も変わっていきます。住まいとは「ともに過ごし、育ち、つながり、引き継いでいく」暮らしの大きな舞台でもあるからです。

京都市の中心部、かつて京町家が建ち並んでいた中京区にお住まいの加茂みどりさんは、ご家族の成長にあわせてマンション内にあるご自宅をリノベーションされました。それが、集合住宅内の住戸にかつての町家の知恵を採り入れて、風の通り抜けを感じることができる「中京・風の舎」です。

加茂さんは、大阪ガスのエネルギー・文化研究所で都市型集合住宅のあり方を検証される「NEXT21」の研究者でもあります。今回は、「中京・風の舎」をお訪ねし、加茂さんに改修への思いやその後の経過についてお話を伺いました。



リフォームのきっかけを教えてください。

やはり、家族の成長が大きな転機になりました。

改修前は、20年ほど前に買った3LDKの和室をつぶしてリビングを広げ、2LDKの形にして使っていました。もともと仕事の資料や本などの持ち物が多かったので、二室は書庫に充てるような状態で、住むスペースが足りていませんでした。子どもが小さいうちはよかったのですが、どんどん大きくなり上の男の子が中学生、下の女の子が小学校の高学年になると、いつまでも同じ部屋ではなく、それぞれに個室をもたせてプライベートを確保してあげたいと思うようになりました。

私自身の研究の専門分野が住宅計画なので、これまで何年にもわたって「NEXT21」で検証してきた成果も採り入れて、新しい住まいの形をつくりたいという思いもありました。

- 1 住戸の横幅いっぱいにとられた玄関土間からは、中央の図書室と左右の個室への3通りのアクセスが可能。室内と同様、石貼りの玄関土間も浮き床になっている。
- 2 玄関からの直接アクセスの一つ、個室へと抜ける障子戸。雪見障子になっていて、障子を閉じて視線を遮りながら室内に風が流れるようになっている。
- 3 居間から玄関を振り返ったところ。図書室の漆床が、正面の雪見障子から入り込んだ柔らかい光にきれいに映える。

風の通り抜けに、 四季の移ろいを感じて

なかぎょう・かぜのや

「中京・風の舎」

京都市中京区

設計

三澤 文子さん(有限会社Ms建築設計事務所)

加茂 みどりさん(大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所)



5



6

- 4 憩いの場、語らいの場となる居間スペース。アイランド型の流し台の側面にも漆塗りされた杉材が使用されている。
- 5 居間とベランダの間にある室内引戸の障子は、白いアクリル板と杉の組子でできたもの。無垢の木材と漆床の濃い色に調和して、和の空間を引き立たせている。
- 6 図書室と子どもの個室につながる洗面スペース。風の通り道になっている。



4

改修の一番の狙いは？

私自身、京都の町家で育ちました。大阪への通勤に不便だったので、電車を通る中心部のマンションに越してきたのですが、最初は家にまったく風が通らないことが不満で仕方がありませんでした。緑化や省エネなど、「NEXT21」でも自然との調和をはかっていますが、古くからある京町家には、気持ち良い風が玄関から家の奥にまで通り抜け、外光も自然な形で採り入れられる先人の知恵がありました。集合住宅に暮らして、集合住宅には風がまったく通らないということを改めて思い知りました。

今回のリフォームの計画では、風の通り道をいちばんに考えました。集合住宅特有の風通しの悪さの解消、合わせて子どもの成長に合ったプライバシーの確保、収納空間の充実、そして住戸内の温熱環境の向上などを大切にしたいと考えました。

改修後のご家族の反応はいかがでしたか。

子どもたちがとても喜んでくれました。娘は友達に自慢していましたし、息子は改修後自分で自室を掃除するようになりました。今では洗濯物も自分たちで片付けています。どちらも自分の部屋を持ったことで、少し自立が進んだのだと思います。「子どもを育てやすい家、子どもが育つ家」に近づいたかなと思います。

実はこの子ども部屋のつくりも、風の通りに大きく影響しています。娘の部屋は私の部屋と書斎とつながっていて、風がそのまま吹き抜けるようになっています。息子の部屋も洗面スペースとつながっていて、風の通り道を確保しています。中央の図書室とあわせると、住戸内に3通りの風の道があることになります。どこかのルートを閉ざしても、別のルートに風が通ります。以前に風速を計測していただいたことがあるのですが、全開したときよりも、ひとつの通り道だけを開けたときの方が風が速いという結果になりました。

木を活かしたしつらえのなか、随所にさまざまな工夫を凝らしておられます。こだわりのポイントを教えてください。

この住戸のもう一つの大きな特徴は、間口幅いっぱいにとつてある玄関土間です。広い土間は、訪れた人をいったん受け止め、ここから図書室、居間へと行けるだけでなく、左右の個室にも直接入れるようになっています。将来、介護が必要になるかもしれません。そんな時、個別の部屋へのアクセスに役立ちます。また、在宅のまま仕事ができる自宅兼事務所や、シェアハウスにも応用できると思います。玄関土間から各部屋に続く扉には、戸の一部分だけが上下に開閉できる雪見障子を取り付けました。木のしつらえにあわせた建具で和の雰囲気を出すとともに、この障子があるからこそ、外からの視線を気にせずに、外の風を気持ちよく室内に引き入れ、四季の移ろいも感じることができます。

木は、今回の共同設計者であるMs建築設計事務所の三澤文字子先生のご専門でもあります。壁や床、柱、棚、天井などあらゆる場所に国産の杉材を使って、日本の伝統的な木組みの手法を活かしています。

特集 巻頭インタビュー 集合住宅再生のためのリノベーション

「中京・風の舎」

- 所在地/京都市中京区
- 設計/三澤文子 (Ms建築設計事務所) + 加茂みどり (大阪ガス(株) エネルギー・文化研究所)
- 施工/(株) 夏見工務店
- 該当工事床面積/76.86㎡ 総工事床面積/76.86㎡
- 新築竣工年/1998年 築後年数/20年
- 竣工/2017年11月 施工期間/180日

主な性能
 温熱性能: UA値 改修前0.86W/mK→改修後0.51W/mK
 補助金: 京都既存住宅省エネリフォーム

導入ガス設備・システム

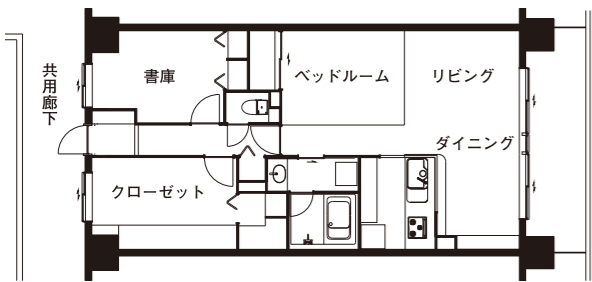
- ガス給湯器
- Siセンサーコンロ
- ガス温水床暖房
- ガス温水浴室暖房乾燥機
- ガス衣類乾燥機
- ガス炊飯器

7 図書室。廊下を単なる通過場所とせず、書架を設けて収納スペースにした。パソコンをもちこんで書斎としても利用できる。

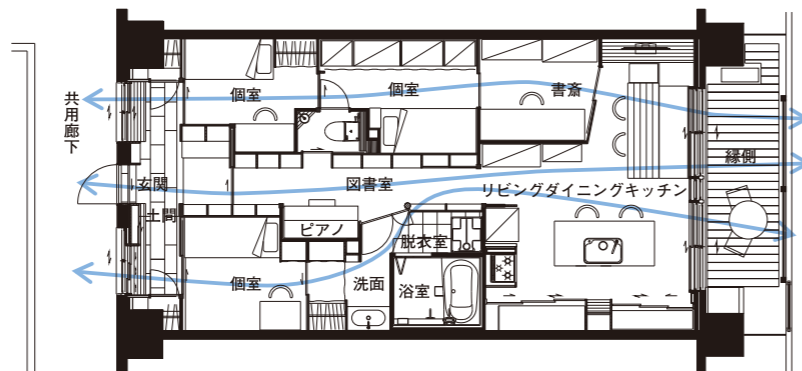
8 図書室の書架の天板から居間へと続く差し鴨居。和の遊び心が室内にも映える。

連絡先: 有限会社Ms建築設計事務所
 大阪府吹田市古江台3-18-10
 電話: 06-6831-5917
 URL: <http://www.ms-a.com>
 連絡先: 大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所 (CEL)
 大阪府大阪市中央区平野町4-1-2
 URL: <http://www.og-cel.jp/>

リフォーム前の平面図



リフォーム後の平面図



*間口幅の玄関土間と摺り上げ下げ障子・続き間により、外からの視線を通さず3本の風の道を確保しました。
 *土間で訪問者を一旦受け止め、個室に直接入れる動線としました。
 *DK空間は交流空間となり、将来拡張可能としました。



床の色が濃いのは漆床といって、漆を塗り込んで乾かした杉板を貼り詰めたものです。厚みは30mmで、二重床になっています。比較的柔らかい杉材は、厚く使うと断熱効果も期待できます。外壁に近いところは、天井にも断熱補強を施しました。私が育った町家では、冬は京都の底冷えに悩まされましたが、ここでは冬でも暖房なしで過ごせるほどです。実際に改修後に断熱性能を示すUA値を計算していただいたところ、0.51W/m²Kと、改修前に比べてかなり向上していました。

の側面にも使用しています。無垢の杉材とのコントラストや、障子越しの仄明るい光とともに、室内の風情を深めてくれます。図書室には差し鴨居が組み込んであります。一般のマシンの内装で見かけることは少ないですが、室内にいながら木造りの和風空間を意識させてくれる装飾になっています。実は私自身が父からの引き継ぎものや思い出の品が多すぎて、どう解消しようかと悩んでいました。その解決策のひとつとなったのが、中央部分の図書室です。書架、天袋、ピアノ設置の場所など、しっかりとした収納を確保しました。

ダイニングキッチン(居間スペース)は、交流スペースとなっています。子どもが独立した後は、私の書斎は子ども部屋に移し、今の書斎周りの壁は撤去して、ダイニングを拡張しようと思っています。住み継ぐ家として将来に向け、予めその部分の壁の撤去は想定した仕様になっています。

大阪ガス実験集合住宅 NEXT21

近未来の都市型集合住宅で、住まいのあり方を考える

NEXT21は、近未来の住まいのあり方を考えるため、大阪ガスが推進している都市型集合住宅の居住実験プロジェクトです。1993年に実験住宅を竣工させて以来、フェーズを重ねるごとに新しいテーマを加えています。2013年から始まった現在進行中の第4フェーズでは、「環境にやさしい心豊かな暮らし」をテーマに、人と自然とエネルギーとの関係を深化させる都市型集合住宅をめざしています。

少子高齢社会への対応や省エネ、スマートな暮らしなどを見据え、〈人のつながり〉では住戸を外に開く中間領域やコミュニケーションの場の創出、〈自然のつながり〉では緑地や外部空間の提案、〈エネルギーのつながり〉では省エネや都市システムとのネットワーク化を提案・実証しています。NEXT21では心豊かな暮らしの実現をはかるため、これからもさまざまなテーマに取り組みます。





木を使うと家が生き、森が生き、地域に活気ができます。大工さんの技術も世界のどこにも負けません。

三澤 文子 さん MS 建築設計事務所 建築家



ダイナミックなことはできないかもしれませんが、とてもいい仕事をさせていたのだと思います。加茂さんが「NEXT21」で培われた経験を活かして、改修時に上下左右の部屋にお住まいの方がいらっしゃる社会性の高い集合住宅でも、十分に仕事が進められることがわかりました。

加茂 「NEXT21」でテーマの一つとなっている環境性能も向上したと思います。住まいのウチとソトをつなげ、訪れる人を受けとめる玄関土間や、住宅の内部を二層構造にして、玄関の鍵を持っていても入れないエリアを設ける試みもできました。シッターさんやヘルパーさんなどのサービスを受けるときに必要な、個室への直接アクセスや、特定エリアのセキュリティを守る事が可能となり、「NEXT21」で取り組んでいたテーマが反映できたと思います。

三澤 そうですね。住まいは長く使い続けるものなので、時の経過とともに、住み継ぐ方の意向に沿った間取りにレイアウトが変更できることも重要です。この風の舎では、居間と書斎の仕切りも撤去することができるのも、有効ですね。

加茂 ベランダの木の床は、部屋履きのまま出入りができて、住戸が広がった気がします。置いてあるだけなので、いつでも取り外すこともできますし。

三澤 ベランダの木の床や収納用の無垢の材、よしず代わりに置いた白い帆布、竹棹を使ったつつかえ棒など、間に合わせの品で代用するのではなく、ほんの少し手を加えるだけで、どれもずっと本格的な住まいが実現しますね。

加茂 エアコンを目隠しする染物にも、この家のテーマの風に合わせて鳥を染めていただきました。この布があるだけでも部屋の雰囲気が変わってきます。今回のリフォームで「NEXT21」にも展開できることがいくつも見つかったように思います。

三澤 私もたくさん勉強させていただきましたし、リノベーションの可能性も広がったと思います。今回の経験をぜひ今後活かしていきたいです。

三澤 文子(みさわ・ふみこ)さん
 1956年静岡県生まれ 1979年奈良女子大学理学部物理学科卒業 1980年大阪工業技術専門学校建築学科卒業 1980年高木滋生建築設計事務所勤務 1982年現代計画研究所勤務 1985年 夫・三澤康彦とともにMs建築設計事務所設立 1991年～99年大阪芸術大学非常勤講師 1996年木構造住宅研究所共同設立(2009年 MSDに改称) 1996年三澤康彦と共に M Oスクール大阪を開校 2001年～2009年岐阜県立森林文化アカデミー教授 2001年グッドデザイン賞(グッドデザイン中小企業長官特別賞)受賞 2007年日本建築学会賞教育賞(教育貢献)受賞 2008年防火構造大臣認定取得 2011年～2015年京都造形芸術大学通信大学院教授 2013年日本建築士会連合会賞、優秀賞(北沢建築工場) 2013年第10回エコプロダクツ大賞審査員特別賞受賞 2015年グッドデザイン賞受賞 住宅・住空間部門 [自適荘一住宅医によるストック活用型社会への取組み] 2016年一般社団法人 ウッドマイルズフォーラム副会長 2016年JAS認定取得[CLT/国産材3層クロスラミナパネル] ウッドデザイン賞(優秀賞/林野庁長官賞)受賞 2016年一般社団法人 住宅医協会理事 2017年Ms建築設計事務所代表 2017年MOKスクール大阪代表 2018年木造施設設計集団(M-TAD) 結成

巻頭特集対談

集合住宅に京町家の暮らしを活かすリノベーション

「住まいのリフォームコンクール」で国土交通大臣賞(最優秀)を受賞!



風が通って、木のぬくもりが感じられる、ほんとうに暮らしやすい家になりました。

加茂 みどり さん 大阪ガス株式会社 エネルギー・文化研究所 主席研究員

国産の木材を室内にふんだんに使った独特な意匠で、住み心地と環境性の良さを両立させた「中京・風の舎」が、この度、住まいのリフォームコンクールで最優秀に輝きました。施主・設計者で住宅計画の研究をされている加茂みどりさんと、共同で設計を担われた建築家の三澤文子さんに、完成までの思いやご苦労を語っていただきました。

加茂 風の舎の設計では、私は計画を担当し、後は三澤先生にお願いしました。それまで直接お会いしたことはなかったのですが、「NEXT21」でお世話になっているある先生にご相談したところ、その場で三澤先生のお名前を挙げていただきました。

三澤 それまでも国産材を使う設計を数多く手掛けていたので、ご紹介いただけたのだと思います。加茂さんは長年住宅を専門に研究されている方だけあって、設計方針や考え方がとてもはっきりしていて、設計をお引き受けすることへの不安はまったくありませんでした。なるほどと思

うことが多かったです。

加茂 先生ご自身はマンションのリフォーム設計は初めてだったんですね？

三澤 そうなんです。私は木造の設計が長いのですが、戸建てが中心で、集合住宅は同じ設計をしている夫にお願いしていました。ただ、「平成の京町家」を大学院の課題で取り組んだりしたことや、木造建築を保守するための木造建築病理学と銘打ったテーマに携わっていますので、集合住宅でも、梁と柱を使った日本の伝統的な真壁設計をしてみたいと考えていました。今回は差し鴨居や漆床をはじめ、断熱と防音効果を狙った浮き床や玄関土間などにも木造の良さを展開することができました。

加茂 最初の打合せで開口一番、「木でやりましょう。」と三澤先生からご提案いただきました。大胆に挿入された差し鴨居、木の建具や棚も、室内全体に和の趣きを演出しています。木の力を感じる家になりました。今回、集合住宅ならではの「ご苦労」はありましたか？

三澤 確かに限られた枠内での仕事になるので、戸建ほど